

福岡市研修旅行

古藤田

太

(会員・弥生町江良)

三月六日

太田一二、五十川千代見、小野英治と私四名は小野英治氏の運転で日田市經由、福岡市に向う。久留米でキウイの苗木を買いたいと思つて苗木屋さんを見て歩いたが、あいにく日曜日で難儀する。折角見つけても「メス」か「オス」か不明であつたりして骨折リ損で終つた。

車はやがて迷路を縫うて基肄城水門跡に着いた。基肄城(椽城)が築かれたのは、天智四年(六六五)八月で、大野城の築城と殆ぼ同時に築城されて、唐、新羅軍の侵寇に備えたものである。この二城は、百済の滅亡によつて日本に逃がれて来た帰化人福留、福夫の指導によつて谷や盆地をめぐらし、両城とも延長五キロに及び、数ヶ所には土塁をめぐらし、両城とも延長五キロに及び、数ヶ所に城門を備え、城内には三十棟に及ぶ建物の礎石が残

されているということである。

百済救援には日本から三万二千の兵士が、国運をかけて送られたらしい。この救援軍は、六六三年白村江の戦に敗れて百済も滅んだ。勝利を収めた唐、新羅の大軍が余勢をかって日本に侵寇するのではないか、と考えられて、このような山城が築かれたかと思つくと、当時の日本の国力というか、天皇権力が既にでき上つていたと思つのである。「水城」も防人の制の徹底も同時に実施されたものであろう。私達は、水門や、城址らしい裏側の遺構を見て歩いた。ここから道を変更して自動車で山頂に登つて行つた。教えらるゝまゝに、天智天皇の碑を遙かに、小さく眺むることができた。草スキーに群がる親子連れを見て、今更ながら千三百年の時の隔りを思ふのである。

混雑する道を辛うじて壮大な歴史資料館に着いたが、ここは私の予想に反して、専ら考古学的な陳列品が多かった。数少ないものゝ内銅板経や、幾つかの仏像には心引かるゝものがあった。

太宰府天満宮に参詣したが大変な人出であった。後で知ったことであるが、この日、平安時代からのならわしの「曲水の宴」が披露されて、この為の見物客の人出であつた。



福岡城多聞櫓

夕暮にかけて、投宿先の黒田荘を探す、ノロノロ運転が続いて、ようやく宿に着いた。かつて黒田藩であつたこの地の黒田荘、小野英治氏の好みに合った宿であつたに違いない。待遇はよく、

皆さんも満足の御様子。

三月七日

八時、先ず訪ねたのが福岡城跡、福岡城は、慶長五年より七ヶ年を要して築城したもので、さすがに五十二万石の大名城、そこいらの城と規模が違うようである。十二代、二百七十年間偉容を誇つた福岡城も、往昔の遺構を伝えるものとしては、南丸多聞櫓があるのみ。

昭和四十六年、この多聞櫓が国の重要文化財に指定されたのを機に、福岡市は復元工事を実施したと説明されている。一般に、多聞櫓は防御の為の長塀であるが、平素は倉庫に使つていたようである。十六の部屋に仕切られて、夫々独立しているが、石落しのみで城外を見ることのできない部屋もあるとのことであつた。

城外に、母里太兵衛邸の長屋門が、福岡県の文化財に指定されて保存されていた。母里太兵衛は「酒は飲め飲め」で知られる母利但馬守友信で、黒田二十四騎の一人である。福島正則から名槍日本号を飲み取つた豪傑として知らるゝ人である。

私達は、神籠石（神護石）の雷山に向う途中、怡土城下を通りかかった。怡土城のある糸島郡前原町は、魏志

倭人伝に出てくる伊都国の地である。ここの高祖山たかすを中心に築かれたのが怡土城である。

天平勝宝八年（七五六）太宰大貳であった吉備真備によって十三年がかりで築城されたものである。築城の目的は新羅来寇の防御のために、又その頃、唐では安祿山の変が起っていて国内騒然たる不安情勢にあったため、この日本に与える影響が心配されたもので、怡土城の築城をいそがしたものであろう。

怡土城の名は、中世戦国期では、大友氏活躍の中に幾度となく登場してくる懐かしい名である。

私達は怡土城跡をたずねんとしたが、道が絶えて途中で引き返し、雷山に向った。雷山は小野氏が勝手知った山である。自動車で登って行く、大変な登山であった。

神籠石は、現在十一ヶ所程発見されているが、雷山の神籠石はその一つである。この神籠石は一米内外の列石が、一つの谷を上流（南）と下流（北）とで二度横切り、そこに水門が構築されている。列石は山体を斜めに取巻くごとのびている。神籠石は、福岡、佐賀、山口県に集中しているが、福岡県には六ヶ所も発見されている。雷山の神籠石は昭和七年に国の文化財指定を受けている。神籠

石は靈域説、或は山城説等があつて未だに定説が無かつたが、最近、佐賀県武雄おつば山神籠石が、朝鮮式山城を証するものであるとの説が傾聴されているようである。神籠石の築造年代にしても、果たして古墳時代後期のものであろうか、等研究の余地はあまりに多い。

おとのえは神籠石のならばたる雷山の唸り

やむことのなき

私共が駐車場所に引返していると、唯一度山の崩るゝ程の大風の音がした。山の唸りであらう。雷山の名の起る所以であらうか。

車を市内の方に引き返して降り立つと、「なみおと湧立の太古の響神の春」の句碑が建っている。元寇の役の今津海岸である。昔、今津浜と呼ばれた辺りであらう。背の低い松林と砂浜が何処までも続いている。僅かの人数でゆくりと海浜公園が造られつゝあった。

蒙古の大軍が、壱岐、対馬に襲来の知らせが文永十一年十月伝わるや、我が大友一族はじめ豊後各地頭に出兵の命令が下った。九月早朝、蒙古軍六百隻の姿が博多湾に現われた。元と高麗の混成軍三万三千人である。二十日の早朝、二隊に分かれて上陸を開始した。一隊は今津



黒田如水・長政の墓（右より2、3番目）

浜から、又別の一隊は箱崎方面に上陸した。これを日本軍が迎え討ったのだが、やがて日本軍は苦戦に陥ち入った。蒙古の戦法が、日本の戦争のやり方と全く違っていたからである。また蒙古軍は鉄砲を使い、大きな発砲音に、日本軍兵は勿論、兵馬さえも驚き恐れた。蒙古の矢は短いがよく飛び、又矢の根に毒を塗って使用したと伝えられている。かくして、蒙古軍の進撃を阻止することができず、日本

軍は後退を続け太宰府も間近の所まで後退したと伝えられている。宮崎八幡宮も蒙古軍の手によって焼失した。この文永戦で日本軍がかかえたおびただしい負傷兵は一遍上人の指導のもとに、

別府で温泉治療を受けたと伝えられている。この事実上の日本軍の敗退は、文永戦後大いに反省されて各種の対策がたてられた。警固番役ができたが、豊後国は筑後国と共に秋三月を担当した。文永戦の経験から、蒙古軍に備え、博多湾沿岸に石塁を築いた。この時の石築地を私共は見学したのである。既に七百年の歳月はこの石築地を深く砂に埋めていたが、最近極く一部を掘り出して見学できるようにしてあった。掲示板によると、建治二年（一二七六）の築造で、石築地の高さは一・八米―三米。幅一・八米―二・四米で、その石築地の長さは二〇kmに及んでいるとあった。大友氏の石築地築造区域は久しく不明であったが、杵築市の生桑寺の大殿若経の裏打紙に使われていた古文書で、判明したことは有名な話である。

そのかみの防塁の石あらわなり

今津浜てふ松林ゆく

次にたがずねたのが崇福寺であった。この寺は福岡城主黒田氏の菩提寺である。広大な境内に由緒を物語る建物が散在しているが、随分といたんでいるものが多い。城主の菩提寺は由緒の名のみ貴く、実を失って、大半このような有様になっているようである。寺僧に篤と願ひ出

て、本堂裏手の黒田氏の墓地に参拝させて貰った。広い墓地、昔はさぞ厳然たる威風を誇った墓地であつたらうと思う。今や、時移り枯草に囲まれて、それでも、間をおいて建てられた如水公、長政公の巨大な墓は人をうつものがある。

戦国の世に秀でたる如水公

あれたる墓地を立去りがたく

唐破風の美しいこの名島城門や山門は国の重要文化財に指定されている。又頭山満先生の墓もこの寺の墓地に在る。

崇福寺の近くに、宮崎八幡社がある。先述したように文永の役で蒙古軍に焼かれたのである。ここに参拝して次の訪問先顕孝寺ゆきの地図を、ここの神職に書いて貰い、不安を伴う地図を頼りに走り出す。南北朝戦乱の初期、足利尊氏が九州落ちして、多々良浜に手兵僅かに五百で到着したが、その多々良浜の僅かに上流を渡る。多々良川を越すと、顕孝寺を探す。顕孝寺は直ぐ判った。

福岡市が建てた「顕孝寺跡」の掲示板が目についたからである。それによると、顕孝寺は室町時代、本堂、客殿、鐘楼、庫裡、輪藏もととのい、塔頭十区、末寺十四

寺を有する博多の大寺であつた。私達は、今は浄土宗となつた顕孝寺にたずねゆき、往昔の顕孝寺（禅宗）の事を松尾住職について御聞きする、住職は何くれとなく、コピーを作つて呉れたり、後年作られた開山の闡提和尚や、大友氏六代貞宗の位牌を持ち出して拝観させて呉れたりした。この寺を辞して庭に出ると、織部灯笼や、享保十年の庚申塔（私達の見慣れた庚申塔と違ふ）が珍らしかつた。

私達は帰途につき、日田市に入って小野氏の案内で臨濟宗妙心寺派の岳林寺をたずねた。もう夕暮で写真が余りあてにならない。この寺は、元弘元年（一三三一）後醍醐天皇の勅願により、郡司大蔵永貞の建立である。この地方は古くから皇室莊園であつた関係からか、南北朝戦乱でも南朝側であつたようだ。この岳林寺はそうした皇室の資料が多く收藏されている宝庫が整備されていてもっと時間をかけて見学したかつたが、時は夕暮れて、私共は匆々に辞し去つて帰途についた。